資料紹介

新出・有島武郎書簡
―大正九年六月二十一日付　浅井みつゐ宛―

稲垣泰一

一

ここに紹介する新出の有島武郎書簡は、愛知県瀬戸市の山城家所蔵のものである。縁あって（奥様が稿者の金城学院大学でのゼミ学生）、筑波大学に在職中であった十年ほど前に、鑑定・調査を依頼されたが、他事にかまけて放置したままであった。今般、文教大学を定年退職するに当たり、承諾を得て、写真掲載とともに、本誌に紹介する次第である。

書簡は封書・巻紙本文ともに墨書である。巻紙用紙は縦十八・〇糎、横九一・五糎の横長で、表装されて額に納められている。額は茶褐色地の布張りで、外寸縦二六・〇糎、横一二一・〇糎である。封筒は縦十九・〇糎、横七・五糎。表（右）、裏（左）が広げられて、透明なビニール袋に入れて、額裏に貼付されている。

封書

（表）市外日暮里元金杉
　　町　おまじない横町
　　浅井　三井様

（消印）麹町　9・6・22　后6―7

（裏）麹、下六、一〇

寿　有島　武郎
　　六月廿二日

（消印）下谷　9・6・22　后9―10

本文

1　浅井みつゐ様
2　御手紙で安心しました。
3　この上は萬望再び
4　あのやうなげき
5　をなさつて両方の両
6　親を御心配おさせ申す
7　やうな事をなさらぬ
8　様願ひます。静かな
9　親しみを以て永くお交
10　ハりしたいと思ひます
11　からそのお積りであ
12　なたも居て下さい。
13　　富本さんハ大変親
14　切に萬事世話をして
15　くれられたので大変助
16　かつてゐます。
17　「惜ミなく愛は奪ふ」
18　をお送りしておきました
19　がお受取下さいましたで
20　せうか。今度のは何
21　やう少しむづかしいと
22　自分でも思ひますが若
23　しわからない所が
24　あつたら私のお答へ出
25　きる事は御答へ致し
26　ます。
27　　雨期になりました。
28　十分御躰を大切に
29　　六月廿一日
30　　有島武郎

なお、本書簡の封筒（表）には麹町局の消印（大正九年六月二十二日、午后六時―七時）が切手の上に押されており、封筒（裏）には下谷局の消印（大正九年六月二十二日、午后九時―十時）が押されているので、本書簡は大正九年六月二十一日付（書簡本文奥付）で書かれ、翌日六月二十二日午後六時から七時の間に速達便で投函されたことが判明する。

二

本書簡の宛先である浅井みつゐは、明治三十年（一八九七）から昭和四十四年（一九六九）までの人物である（本書簡の大正九年当時、浅井みつゐは満二十三歳、有島

武郎は満四十二歳である）。口絵・挿絵画家で、名は「三井」「三ツ井」とも表記した。日本画家尾竹越堂の末娘で、幼時に父の友人である画家浅井呉竹の養女となった。姉には青鞜派同人の尾竹一枝（紅吉）（結婚して富本一枝）がいる。

大正八年（一九一九）頃から女学生を対象とした雑誌に口絵・挿絵を描いたり、院展に三度も出品したりしている（ただし入選はしなかった）。有馬武郎の作品には、『クララの出家』の七場面、『聖餐』の一場面の挿絵を、雑誌「文章倶楽部」に掲載している。武郎とは家族ぐるみの友人関係であり、書簡も多数残る。有島武郎は大正八年（一九一九）から晩年までの間に、八十一通もの書簡を彼女に送っているという。[1]後に、画家野口謙次郎と昭和十七年（一九四二）に結婚する。

三

本書簡の後半によれば、有島武郎は『惜みなく愛は奪ふ』を浅井みつゐに送ったことが知られる。『惜みなく愛は奪ふ』は大正六年（一九一七）六月一日発行の「新潮」第二十六巻第六号の巻頭評論として掲載された『惜みなく愛は奪ふ』[2]を、数年かけて新しく書き下した作品である。大正九年（一九二〇）六月五日発行の有島武郎著作集第十一輯『惜みなく愛は奪ふ』（叢文閣刊）の巻頭に掲載された。[3]本書簡は大正九年六月二十一日付であるので、該書が刊行されて十六日後に出された送り状でもある。有島武郎全集第十四巻、書簡二（筑摩書房、昭和六十年六月刊）の大正八年（一九一九）三月五日付の浅井みつゐ宛書簡（書簡番号一二一五、以下同じ）に「『惜ミなく・・・』ハこつちを探して見ます」と記している。これは大正六年刊の作品を指していると思われる。このように『惜ミなく・・・』を探していたので、大正九年刊の『惜みなく愛は奪ふ』が刊行されると、すぐさま送付したのであろう。

本書簡の文面によれば、少々むずかしいと思われるので、質問があれば答えると記している。『惜みなく愛は奪ふ』は自己存在をめぐる思索を深めた結果、「本能的生活」（純粋愛）が理想的であるとする、自己絶対化の思想を展開する観念論的評論である。若い浅井みつゐには難解なところがあろうかと、やさしい心遣いをしているのである。

次に大正八年（一九一九）から九年にかけての浅井みつゐ宛書簡（有島武郎全集第十四巻、書簡二所収）にざっ

と目を通してみる。

大正八年十二月十九日付書簡（番号一四三〇）では、作品『三部曲』に対する感想文拝見との返事をしていたり、同年十二月二十五日付書簡（番号一四三四）でも、創作についての感想に対して感謝している。そして画作を見せてもらいたいとも記している。大正九年二月二十日付書簡（番号一四七七）では、『惜みなく愛は奪ふ』に取りかかったことを述べるとともに、「改造」と「我等」に小品を載せたので、読んでもらいたい旨記している。

一方、大正九年三月十三日付書簡（番号一四九三）によれば、子供と武郎に浅井みつゐの画が送られていることが分かる。また、同書簡では、聖クララの画の購入方法や丸善で注文すればよいとも教えている。同年四月二十日付書簡（一五二〇）では、聖クララの画と浅井みつゐの画とを比較して、感想を述べている。このような書簡内容から、浅井みつゐは有島武郎の創作に対しての批評と感想を述べ記し、有島武郎はみつゐの画作に対しての感想を述べるという、相互に相手の作品に対する批評と感想を述べ合うという関係にあったことが知られる。

ただし、大正九年一月二十九日付書簡（番号一四六二）に「これから決して私を基督などと比較するような了ハ假にもしないやうにして下さい」と記したり、同年三月十二日付書簡（番号一四九三）では、「私の顔をヱスなどと言ってはいけません」とも述べている。同年三月二十六日付書簡（番号一五五五）では、「私のどこが偉いものですか。私はいつまでも一箇の平凡人ですよ」と謙遜している。これらのことから推察すると、浅井みつゐは有島武郎のことを、顔も人格もイエス・キリストのようであると思慕し、大変偉い人として深く尊敬の念を寄せていたようである。

本書簡の前半に記されている、両方の両親に心配させるようなことをしないように、との文面の背後にある事情は不明である。しかし、静かな親しみの中で、永く交際していきたい旨記していることは、大正九年三月二十四日付書簡（番号一四九七）の文面に見られる心情と通じていよう。そこには「然し實際をいふと私はあなたの十分な相談相手ではないかと思ひます。然し同時にあなたから今私が離れてしまつてはあなたには可なりお迷ひになると思ひます。（これは私の自惚れかもしれないけれど）。であなたが私を信じわたしに對して眞實を持つて下さる事が出來るなら私もあなたを何處までも信じてあなたの生長の爲めに出來るだけの事はするつもりです」と記されている。つまり、浅井みつゐの良き相談相手として、また、生長を見守る庇護者として、有島自身が最も

ふさわしいと告げているのである。同書簡では、姉の一枝もみつゐのことを大変心配しているようであるとも記している。

最後に、本書簡に見える「富本さん」は、書簡（番号一二五〇）、（番号一二八三）（番号一五六一）などにもその名が記されている。この人物は、浅井みつゐの姉一枝の夫であると考えられる。

以上、有島武郎の新出書簡の紹介と簡単な調査を記した。

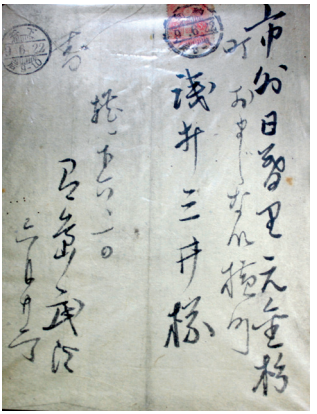
注

（1）佐々木靖章編著『資料　有島武郎著作目録・著作解題』（萬葉堂出版、昭和五十三年五月刊）の「浅井三井」の項、及び有島武郎研究会編『有島武郎事典』（勉誠出版、平成二十二年十二月刊）の「浅井みつゐ」の項（伊藤佐枝執筆）による。

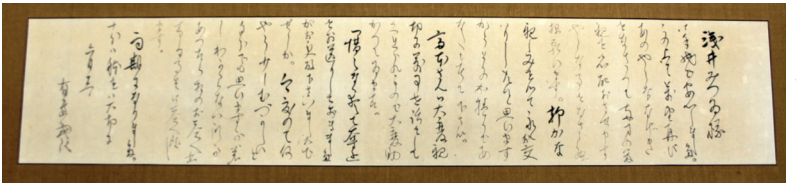
（2）有島武郎全集第七巻（筑摩書房、昭和五十五年四月刊）の解題による。

（3）有島武郎全集第八巻（筑摩書房、昭和五十五年十月刊）の解題による。

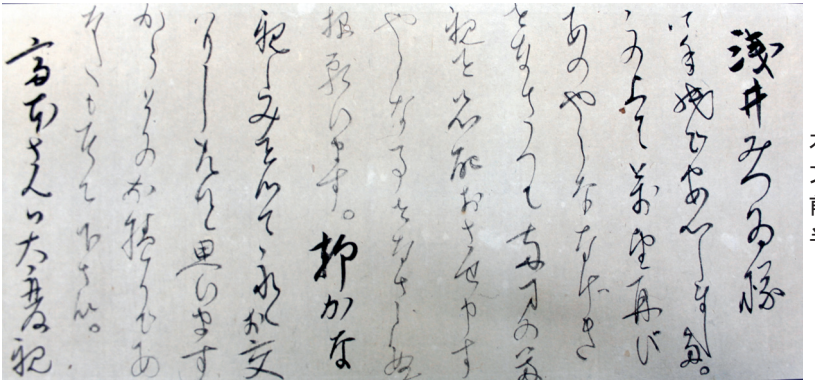
（本学教授）



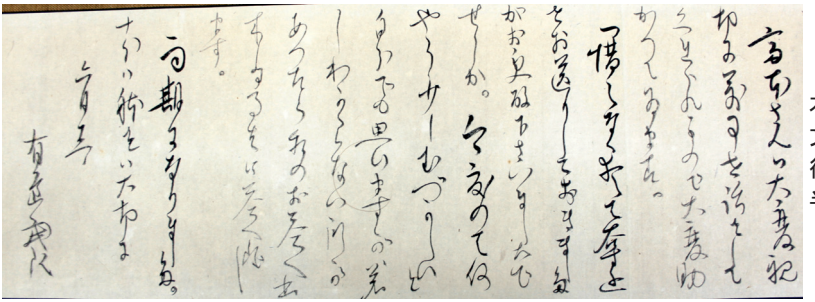
封書



本文



本文前半



本文後半